

「ローカルサミット NEXT in 南砺」参加報告

開催日時：2019年10月26日（土）、27日（日）

開催場所：富山県南砺市 城端別院善徳寺、南砺市城端伝統芸能会館じょうはな座

宿泊場所：城端別院善徳寺

はじめに

私たち周牧之ゼミは、2019年10月26日（土）、27日（日）の2日間、富山県南砺市で開催された「令和元年ローカルサミット NEXT in 南砺」に参加した。

ローカルサミットは、「全国の幅広い『志民』との連携の中で、地域活性化の輪を広げると共に、従来の人間中心の成長至上主義から自然との共生・循環に立脚した価値観への転換を共有しようとするサミット」で、環境省などが協力し、（一社）場所文化フォーラム、NPO 法人ものづくり生命文明機構が各地の諸団体等と連携して2008年から毎年開催されている。

周ゼミは、2016年「第9回ローカルサミット in 倉敷おかやま」、2017年「第10回ローカルサミット in 東近江」、2018年「ローカルサミット NEXT in 小田原」に続いて4回目の参加となった。

アンケート調査について

私たちは今回のローカルサミットに向け、約一カ月間、南砺市観光動態に関するアンケート調査を行った。このアンケート調査ではアンケート作成時から回答回収時まで、多くの回答を得られるようにゼミ生が各々で工夫を凝らした。その結果、今回のアンケート調査の主な対象は学内の学生などの「若者」であったものの、さまざまな年代、職業の方からも計1,108件の回答をいただくことができた。また、Googleにアクセスすることのできない中国からも、日本とは別のフォームを利用することで回答を回収することができ、日中両国合わせて約2,000件もの回答を回収することができた。これにより日本国内とインバウンドとしての中国を比較することのできる調査報告を作成することができた。

1 日目 2019 年 10 月 26 日 (土)

ローカルサミットの開催に際してまず、基調講演が行われた。ここではまず南砺市の「エコビレッジ構想」を用いた街づくりや、目指す最終目標、南砺市の課題や問題と未来について話があった。次いで南砺市が「一流の田舎」を目指していることやそのための挑戦、また自治体が SDGs に取り組む意味などの話があった。

基調講演が行われた後、今回のローカルサミットのメインテーマである「世界に誇る一流の田舎」について 10 の分科会に分かれて各テーマの視点から話し合いが行われた。

周ゼミ生は 3 つの分科会に分かれて参加した。第 7 分科会に参加したゼミ生は事前に行ったアンケート調査の結果を踏まえたプレゼンテーションを行った。以下は参加したそれぞれの分科会の報告である。

第 7 分科会 本物で勝負する 田舎観光を考える (観光)

まず、私たちが約一カ月間かけて、南砺市の観光・まちづくりに関するアンケート調査の実施について、分科会の場を借りて調査結果を発表した。対象は、首都圏の若年層と中国に住んでいる方を特徴としたアンケート結果である。注目されたのは、旅行先の情報をどのようにして入手しているのかということと、観光地に対して何を求めているのか、ということだ。有効回答数は、国内で 1108 人、中国では 952 人だった。今回のアンケートを通して、日本と中国で同じ質問をすることで、両国の観光に対する意識の違いが明らかになった。有効回答数の男女比率は半分であった。回答者のほとんどは、関東に住んでいる若年層ということもあり、南砺市を知っているかという質問では、知らない割合が 9 割を占めていた。南砺市の読み方が分からないなどの意見もあり、知名度はあまり高くないことが明らかになった。反対に、知っているという方は南砺市について、歴史や文化、自然が豊かというイメージを持っていた。合掌造りや株式会社 P. A. WORKS で南砺市を知ったという方が圧倒的に多い。交通の便が悪い、雇用が少ないのではないかという意見もあった。旅行先の情報や普段の生活でどのようなツールを使って調べているかという質問では、携帯、テレビ、新聞という順であることが分かった。中でも、Google を使うことが多いという結果で、私自身も Google を使って調べることも多いため

納得のいく回答であった。逆にフェイスブックは以前より使用している人が減少気味で、時代の流れを感じた。まちづくりでは、美食と風景が重要な要素となっていた。中国人の回答では、風景の方がより重要な要素となっていて、興味深い結果となった。

次に、市内、市外のパネリストを中心に様々な視点から観光について議論が行われた。宿を経営している市内の中西さんは、民宿地域ならではの技術や風景、食事を体験してもらうことで海外の観光客だけでなく、リピーターの方も多く、地元の良さを全面的にアピールしていると語った。同じく民宿を営む市外の中安さんは、やみくもに観光客を増やすのではなく、来て下さる観光客一人一人と真摯に向き合っ、楽しんでもらうことを優先し、地域にリスペクトがある観光客を呼び込んでいくことを大事にしていると語った。

私たちが行ってきたアンケート調査は、今後の「観光」を考えていく上で、非常に影響力のある資料となった。実際に、分科会では多くの方が関心を持っていて、価値のあるアンケート活動であったと実感した。また、自分たちでアンケート調査をし、データにまとめ、分析したことにより様々なことが明らかになり、より南砺市や観光について知る事が出来た。伝えたい要点を明確にしながらも笑いも交え、「観光」というテーマに沿って行った熱のこもった話は、「一流の田舎」を目指す上でひとつのステップになったに違いない。

第9分科会 情報と5Gで 田舎が東京を超えて世界とつながる (IT)

第9分科会では「5Gで作る田舎」をテーマに議論された。

そこではまず5Gによってどんなことが可能になるか説明された。具体的には、2時間の映画を三秒でダウンロードが可能、ロボットをよりリアルタイム通信で働かせられることができる、100万台同時接続も可能といったことだ。

次に話されたのは5Gの活用方法だ。この場で出た活用方法は医療技術と農業、建築現場についてだ。田舎に住んでいて、遠出をしないと診察できず、手術できない問題を解消する医療技術であり、遠隔診察や遠隔手術が可能になる。

続いて農業では、畑に足を運ばずともドローンがセンサーにより水や農薬を散布することが可能となるようだ。また、AIにより室内温度、湿潤、水、農薬、紫外線、全てを管理し食物を育てる農業も可能になるのではとの話であった。

最後に建設現場での活用だが、ドローンを飛ばして3Dデータのリアルタイム測量解析や図面化、現場確認が可能になる。また、そこでデータを分析して無人機械を操作することも可能になるようだ。

次に話題となったのは「5Gで新しくなる世界に私たちがどう対応するのか」だ。

その為には3つの対策が必要だといわれた。①政策決定層のデジタルリテラシーの向上②社会システムの浸透③ロボットとの共存、「ロボットの奴隷にならないことが大切」の3つの対策をしていかなければ5Gは便利にはなっても、社会に弊害をも生むことになるかもしれないとのことであった。

以上が第9分科会で議論された主な内容だ。5Gは様々な選択肢を私たちに与えてくれる。それは衰退しつつある田舎が一流の田舎になるために大きな契機となるであろう。

第10分科会 一流の田舎をみんなで楽しむ方法（遊び）

第10分科会では遊びをテーマに南砺市内外の4人のパネリストがそれぞれ取り組む活動についてお話して下さった。

福野家守舎代表 北川智之氏

福野家守舎は遊休施設や空き地、農地の再生や子育て世代の定住の促進、質の高い教育の推進とコミュニティーの維持、再生を掲げて活動している。

主な活動はNishichi マルシェといったワークショップで掃除した空き家を利用し始めたのがきっかけだった。毎月開催しており、計30回以上開催している。空いている農地を借り、自分たちで栽培し収穫体験をしたり、それをマルシェで販売したりしている。小学校でマルシェについての授業も行い、子供たちでマルシェに出店し、大変賑わったという。

(株)つなぐ南砺代表取締役 山瀬悦朗氏

山瀬悦朗氏は桜ヶ池ネーチャースクールを運営している。南砺市の小学校からメンバーを募り1年を通してほぼ毎月季節にちなんだ遊びや体験をしている。この活動を通じて自然の仕組みや恵みを学び、自分で行動すること、友達と仲良くすることを目的としている。

田舎には遊ぶ場はたくさんあるがそれを生かしていないので、もっと生かしていかなければならないと話していた。

山瀬悦朗さんは子供たちに手間をかけすぎているのではないかという疑問を持っている。1回の活動に半年ほどかけ入念に準備しているが、ただ大人が与

えるだけでなく、子供たちに自主的に活動させたほうが良いのではないかと考えている。その他にも子供たちが本当に楽しめているか、運営スタッフの高齢化によりいつまで続けられるかといった不安な点もあるという。

ONESTORY 事業開発プロデューサー 福持良之助氏

福持良之助氏は「DINING OUT」という野外レストランのイベントを全国各地で開催している。国内や海外から一流のシェフを呼び地元の人と調理からサーブまで一緒に仕事を行い協力してイベントを作り上げていく。地域特有の資産を様々な角度から見つめることで新しい地域価値や観光資源を作り出すことができる。

食事だけでなく、市内ツアーや物づくりの企画もあり、その取り組みの一連をイギリスの番組で放送したり、雑誌で取り扱ったりと地域のPRの効果はとも高い。

アンケートを取ると、その土地でしか感じられない雰囲気や空気、香りを感じられるなど満足度は高いようだ

野遊びリーグ常務理事・事務局長 後藤健市氏

後藤健市氏は地方創生には様々な課題や解決法があるが自然をどう生かすかという点から野遊びをキーワードに活動している。地方創生には現状を素直に受け止め、素直な心を持ち自己責任で行動することが重要だという。

人間は言葉を使う生き物であるから言葉をうまく戦略的に使わなければいけない。ネガティブな言葉でなく、ポジティブに戦略的に使うことが大切である。そのために意識を変え、言葉を変えていく必要がある。言葉を変えること、言葉遊びの例に「イキバリ」という言葉がある。これは後藤健市氏が考えた言葉で行き当たりばったりという言葉を変えて言葉遊び風に変え、「行き当たりバッチリ」に変えたものである。信頼する仲間同士だと行き当たりばったりであってもうまくいき成功することができる。街づくりも信頼できる仲間同士で行うことが重要であるが、それが出来ていない現状にあると話していた。

4人のお話を聞き田舎では様々な遊びに関する取り組みがあるのだと知った。都会では出来ない自然を通じた体験は田舎にしかできない特別で、とても貴重なものだと感じた。

2日目 2019年10月27日(日)

分科会報告

ローカルサミットの2日目は初日に行われた各分科会で話し合われた問題点やこれから取り組むべきことについて報告された。農業や芸術、地域教育、地方自治など様々な分野の問題点や課題について分科会参加者の意見が報告された。

大討論会

各分科会の報告を踏まえ「南砺幸せなSDGs志民憲章」について各分科会の市内外の10人のパネリストが討論した。大討論会では南砺市がより一流の田舎を目指すために農景観や水路を守ること、農産物の加工に力を入れることが挙げられた。一流とは普通であり、つまらないものに縛られていることが三流であるという話が出た。

土徳についても話があった。田起こしの際に見られる陽炎こそが土の生气であり、土の生气を感じることができる状態を残すことが土徳を継承するということである。土徳とは大地に根差した可能性であり、本来私たちが持っているものである。土徳はとても多くのものを含んでいるため、言葉にならないものと言われている。だからこそ言葉の無かった時代から伝わっていて、同時に言葉にならないからこそ、次の世代にどのようにして伝えていくかが最も大事である。

また、世の中の会社が人手不足であるように地域社会も人手不足であるため、地域や学校が協力して子供たちに教育していくことや、ありのままを受け入れ、得意なことを伸ばし苦手なことは周りに協力してもらうなど、1人も取り残さない地域でのつながりを作り、どう次の世代に伝えていかなければいけないかを考えていく必要がある。

ローカルサミットの締めくくりとして、これから南砺の行政と市民が共同のまちづくりをしていく1つの覚悟の表明として、一流の田舎を目指す実現の一步として南砺幸せSDGs志民憲章が、島田優平実行委員長から表明され、実現が南砺市長、田中幹夫氏や行政に託され、ローカルサミットは閉幕した。

ゼミ生感想

最後にゼミ生の感想を紹介したい。ローカルサミットに参加して田舎に対しての関心が強まったという感想が多かった。各々、地方が抱える問題点や改善すべきことを考えるようになり、自分自身の考え方が変わるとても良い機会となった。

またアンケート調査では2000件を超える回答を得ることができ、観光客が観光地に求めることが明らかになり観光業に興味を持つようになる者もいた。どのように工夫したらより多くのアンケートを集められるかそれぞれが考え、とても良い経験になった。

この度のローカルサミットにおいて、私たちは大変多くの方にお世話になった。とくにローカルサミット事務総長である吉澤保幸氏、ローカルサミット事務局長の今井良治氏、南砺市交流観光まちづくり課の嶋田篤志氏に深くお礼を申し上げたい。

周ゼミ生一同